

それは、曜日が変わってしまいそうな金曜日の夜の時間帯のことだった。

夢子は会社でひとり、残業していた。

オフィスビルのちょうど真ん中辺りに入っている夢子の会社から窓の外を見ると、週末ということもあっていつもより周りの他のビルの明かりは少ない。

いつもは同じく残業している誰かがそこにいてそれを勝手に心強く感じているが、それもないとなると余計に辛く感じた。

「帰っちゃおうかなー…」

誰もいないオフィスで頬杖をつきながらぼつりと呟く。
家で仕事したくないけれどもう会社を出ないと電車もなくなる。

連日の残業で疲れた頭をとりあえず一眠りしてリセットしたい気持ちもあった。

「……、帰るか」

決意した自分を奮い立たせるようにデスクに勢いよく手をつけてからパソコンの電源を切った。

それから戸締りを確認してすぐにオフィスを出る。

エレベーターまで行ってボタンを押すと、エレベーターは上の階から下ってくるようだった。

途中の階で何度か止まっているのかまっすぐに夢子がいる階まで降りてはこない。夢子と同じくこの時間まで働いている人がいたのだろう。

とは言っても同じビルに入っている他の会社のことはほとんど知らなかった。

普段エレベーターで顔を合わせることはあっても相手がどの会社の人間かも知らないし、なんならどんな会社が入っているのかも知らないのだ。ビルの入り口に会社のリストはあるが会社の名前すら曖昧だ。

エレベーターがついて扉が開くと、中には五人の男性が乗っていた。

若い作業着の男、夢子より歳上に見えるスーツの男が二人、それから若い私服の男も二人。それぞれ別の会社なのか、それとも同じ会社だがエレベーターの中で話しを控えているだけなのかは分からない。

夢子はそこへ乗り込んで一階のボタンが押されているのを確認してから扉のほうへ向いてエレベーターが下る

のを待った。

帰ったら何を食べようか、何を飲もうか…。

それから週末は映画でも見て外でご飯を食べて、どこかで仕事はしなければいけないがそれ以外をできるだけ有意義に過ごしたい。

夢子がぼんやりこれから来る二日間の休みについて考えていると、

ガタンッ

エレベーターが音を立てて、突然止まった。

「うわっ」

「大丈夫ですか？」

「す、すみません…」

夢子を含めて乗っているうちの何人かがよるめいて、他の人に支えられる。

「え、エレベーター止まった？」

「嘘だろ…マジで？」

「とりあえずこういうときって非常ボタンでいいんですよ？」

「それ、それ押しましょう！」

それぞれが声をあげて、その内スーツを着ていた男がパネルの上部についていた非常ボタンを押した。

——繋がった先の管理会社によると「メンテナンスの人間を行かせるからそれまで待ってほしい」とのことだった。

金曜日の残業を終え、週末を楽しみに帰るはずだった六人はそこに取り残されてしまったのだ。

「災難ですね…」

「ですねえ…」

それなりの広さがあるエレベーターでそれぞれが壁にもたれて向き合っていた。

スーツの二人は立ったまま、作業着の男と私服の男二人は壁にもたれて座り込んだ。

夢子も座りたい気持ちはあったが服が汚れるのが嫌で立っていた。ただ、あまりにも長時間閉じ込められたら座ってしまおうと思っていたが。

「こんな時間まで仕事なんて大変すね」

「お互いさまでしょ？」

「俺たちフレックスなんでここ来たの昼過ぎですよ、朝から仕事してるほうが大変すよ～」

この不幸な状況を慰めあうような浅い雑談。

夢子も相槌を打ちながら、閉じ込められたのが一人じゃなくてよかったと頭の片隅で思っていた。

その雑談の途中、私服の男が座り直したとき。

ヴヴヴ…、

と男のバッグから音がし始めた。

「スマホ鳴ってるよ、君じゃないの？」

「…あ、やべ、スイッチ入っちゃった」

「お前何してんだよ」

慌てる私服の男がバッグから取り出したもの。

それを見て残りの四人ははぎょとした。

アダルトグッズのローターだった。

「うちの会社、大人のおもちゃの通販の会社なんです

よ」

「あ、ああ、そうなんだ…」

「友達にあげようといくつか持って帰ろうかと思って」

スーツの男も作業着の男も、なんとなく気まずくなって目をそらす。

夢子もどう相槌を打っていいか分からず下を向いた。きっと自分に見られるのが一番気まずいだろうと思ったのだ。

けれど男は正面の壁にいた夢子を覗き込んできた。

「お姉さん、こういうの使います？オナニーするでしょ？」

「え…、」

夢子は驚いて男を見る。

男は茶化す感じでもない。普通の世間話のように話してくるから夢子は怯んでつい答えてしまった。

「つ、使わないです」

「えー！指でする派？おもちゃ色々試したら絶対ハマりますよ！」

「お前初対面で何聞いてんだよ」

スーツの男たちと作業着の男の視線が痛い。
夢子と私服の二人組の話に黙ってしまっている。

「そうだ、使ってみます？いま」
「いま！？」

無邪気に差し出してきた男の手には小さなピンク色のローター。卵型で、繋がれたケーブルの先にスイッチがあるよく見るタイプだ。

夢子は実際アダルトグッズの類は使ったことはなかった。

オナニーは人並みにする。最近は忙しくて、したのがいつだったか忘れるくらいだが。

もちろんアダルトグッズに興味がないわけではない。だとしても人前で使えるわけがない。

他の三人も男が言い出したことに目を見開いている。

「あ、別にクリに当てるとかじゃなくて…どんなもんか腕にでもくっつけてみようかなって」

「これローターにしてはちょっとお高いんでけっこう振動強いですよ。ほら腕出してくださいよ」

「あ、ああ、腕…」

腕と言われて夢子はほんと胸を撫で下ろす。

そして差し出した男の手のひらに自分の手のひらを重ねてしまった。

「こっちがスイッチになっててー…」

男がスイッチを押すと小さく振動音が聞こえた。

それをゆっくり夢子の手の甲に当てる。

微かな刺激。くすぐったいくらいだった。

「これ十段階なんでゆっくり強くしますね」

ボタンを押して、少しだけ振動する力が強くなって。

また押して、少しだけ強くなって。

まだ三段階目。だがもう「くすぐったい」は超えていた。

「この振動をクリに当てるんですよ、どう？」

隣のもう一人の男も夢子を覗き込んでくる。

そう言われて、手の甲でぶるぶると震える小さなローターから夢子は目を離せなかった。

想像してしまう。想像して顔が熱くなってしまう。

「クリじゃなくてもこうやって…」

男がローターで夢子の手を撫で始めた。

細かな振動が手の甲から指の付け根へゆっくりと移動して。

「肌に滑らせるだけでも焦らし効果あっていいですよ」

指先へ向かっていって、爪にヂヂヂッと音を立てて当たったとき。

「……っ」

その鋭い刺激に夢子は短く息を吐いて手を引っ込めてしまった。

自分の体に、嫌な予感がした。これ以上はまずいと思ったのだ。

「ほらあ、手出して」

男は夢子が手を出す前に夢子の手を掴んで引き寄せた。
震えたままのローターを手首に当てて、夢子の腕を撫でながら上がっていく。

「もう一段階強くする？」

またボタンを押されて。

既に夢子が「強い」と思う振動が腕をくすぐっている。
「お姉さんのクリトリスはどれくらいが気持ちいいの？
強いのがいい？」

気付けばもう片方の手ももう一人の男に握られて。
夢子は両手を軽く拘束されているようだった。

「足やってみよっか、太ももとか…」

ヴヴヴヴヴ…

もう音がはっきりと聞こえる。

そのローターが触れるか触れないかのぎりぎりの触り方で、

「……っ」

太ももの薄い皮膚を滑り始めた。

スラックスの布越しのチリチリと細かい振動で皮膚が揺れる。

それが夢子の嫌な予感を増幅していった。

ローターは膝の少し上から足の付け根へゆっくりと上へ移動して。

鼠蹊部まで達しそうになったとき夢子はさすがに足を後退りさせた。

「あの、もう…」

それでも男の手は止まらず。

ローターは鼠蹊部へ移動して。

「…っ」

夢子が一瞬顔を歪ませ体をぴくりと動かすと男たちはもう止まらなかった。

「あれ、お姉さんもしかしてこれで感じちゃってる？」

「もうちょっといこっか」

そのローターは足の付け根をあっという間に滑り夢子の中心部分まで移動してしまったのだ。

「あ…っ」

急にその部分に与えられた刺激に夢子は思わず壁へ背中をついた。

腰を引いても両手を男たちに握られていてうまく逃げられない。ローターもすぐに追ってくる。

スラックスと下着を挟んでいてもその刺激は確かにクリトリスへ送られてきてしまう。

「ちょっと、もういいです、離してください…」

「まだローターの強さ半分も行っていないんですけど？」

「もうちょっとやってみましょうよ」

そして男はまたスイッチを押した。

「……んっ」

振動を増すローター。

夢子の体がまた震える。

夢子は男たちの後ろの残りの三人を見た。

その表情は気まずそうな顔をしつつ、止めてくれる気配はない。

それどころか気まずそうな表情の奥、好奇心を隠せない目で夢子たちを見ているのだ。

「お姉さんのクリトリスどこかな〜♡このへん？もっと押し付けよっか」

「ん、…っ」

「もっと強くするね」

「ふ、うっ」

「…ローター足そうかあ♡俺のバッグにまだ入ってるから…後ろのお兄さん、誰か取って」

「…！」

クリトリスにローターを当てたまま、男は後ろを振り返る。

目を見開く男たち。お互い顔を見合わせ、その内にひとりが好奇心に駆られ私服の男のバッグに手をかけた。スーツの男だ。

「…えと、これでいい？」

「それぞれ、じゃあお兄さんも参加しようよ」

スーツの男が持っているのはいま当てられているロー

ターと同じものだった。

そのローターを手にスーツの男も夢子もたれて壁側へ近づいてくる。

夢子は男たちに追い詰められ心臓が高鳴っていった。

「お姉さんもうそろそろ他のところでも試してみたいんじゃない？お兄さんは乳首狙ってあげたら？」

スーツの男はそう言われすぐにスイッチを押して、

「んー…と、こう？」

ヴヴヴヴヴ…

夢子の体へ震えるローターを近づける。

ヂヂッと音を立ててわきの辺りへ当てたあと、

ゆっくりと胸の外側を回って、

それから中心へ近づいてきて、

「お姉さんの乳首、どこかな」

大きく描いていた円が小さいものになっていく。

「……は、っ」

焦らされるように移動してきてその振動が乳輪の辺りまで来ると

夢子は荒くなる呼吸を隠すこともできなくなっていた。

「もうちょっとかな？」

ヴヴヴヴヴ...

布越しの鈍い振動。

乳輪が震わされ、男の手が布を押し上げる頂点を狙った。

「あ……ッ♡」

シャツと下着越しなのに♡

焦らされ服の中で勃起あがったそこに固い振動を当てられて♡

夢子の足は崩れそうになった♡

「あれ～、お姉さんそれえっちな声出てない？♡」

「ちがう、ちが…っ、んっ♡」

男二人に腕を捕まえられ、

ひとつのローターはクリトリスを狙い、

もうひとつのローターは乳首を狙っている♡

ローターの振動はまた大きくなって夢子の逃げようとする体をしつこく追いかけた♡

ヴヴヴヴヴ...

「…っ♡ん、っ、…っ」

乳首をチリチリとくすぐられ♡

ヴヴヴヴヴ...

「は、あ♡…あ♡」

クリトリスにぐりぐりと押し付けられ♡

夢子は背中を壁に押し付け、崩れかけの理性と共になんとか立っている♡

「ローター気に入ってもらえた？でもやっぱ直接味わってほしいなあ♡」

「服脱いじゃおうね～♡」

「乳首も…直接がいいよね？」

男たちの手が夢子の服にかかり夢子が抵抗する間もなく♡

シャツのボタンは開けられスラックスは床へ下ろされてしまった♡

「下着まで濡れてんじゃん♡」

男は嬉しそうにそう言いながらまたローターをそこへ近づける♡

「てかクリ勃起してる♡パンツ押し上げてるわ、可愛い♡」

「もしかしてしょっちゅうクリオナしてんの？クリおっきいね♡」

ヴヴヴヴヴ…、ヂヂッ♡

強い振動のままのローターが、

下着の上からでも位置のはっきり分かるクリトリスに
触れて♡

「あ…ッ♡♡」

漏れる夢子の声に男たちは嬉しそうにクリトリスを責
めた♡♡

ヂヂ♡ヂヂヂッ♡♡

クリトリスの根元を辿るように回って♡

「んっ♡あ、あ♡」

ヂヂヂッ♡ヂヂ、ヂ♡

幹を上がって♡

「…っあ♡う♡ん♡」

ヂヂヂヂヂヂッ♡♡

頂点に押し付けられて♡

「あ、ア…♡♡う、ん♡♡」

また根元へ戻って行って、幹を上がって、頂点に押し
付けられて…♡♡

それを何度も繰り返される♡

ヂヂヂ、ヂヂヂヂヂッ♡♡

ヂッ♡、ヂヂ♡♡ヂヂヂッ♡♡♡

ぐち♡ぐち…♡ぐちぐち♡♡

「は♡ん♡あっ、は♡あ♡」

溢れてくるのが自分でも分かる♡

下着を湿らせて内ももが震えて♡

ローターの強く細かい振動でクリトリスを揺らされると気持ちよくなってしまう♡♡

「乳首もしてあげようね」

また胸の輪郭を辿っていたもうひとつのローターは今度はブラジャーの上から押し付けられ♡♡

ヴヴヴヴヴヴ…♡♡

「あ♡あ♡あ、あ♡や、あ♡」

ビリビリと背中が疼く♡

電流のような刺激が背中を駆けて行って夢子は喉をそらせて声を漏らしてしまった♡

「クリも乳首も両方きもちーねー♡」

「このままイける？♡イってもいいよ？♡」

機械的な刺激に夢子の体が引き攣っていくのを男たちは見逃さなかった♡

また一段階、ローターの振動が増して♡

ヴヴヴヴヴヴッッ♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴヴッッ♡♡

痺れるような強さになってしまった♡♡

「…あッ♡♡あゝ、あッ♡♡つ、つよ、い♡♡あ、あゝ♡♡」

気付けば夢子は縋るように男たちにしがみつき♡

体の奥から迫り上がってくる感覚に神経を集中させて



ヴヴヴヴッッ♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴ…ッッ♡♡

夢子は背中を丸めて力んだ♡

「…………う、う♡♡だめ、いく、いっちゃう、…っ♡♡
…………、あッいくっ♡♡いくッ♡♡♡…………ッ！♡♡
♡」

びく、

びく、びく♡

立ったままの夢子の下半身が痙攣するように震えた♡

力んでいた体から力が抜け、夢子が口を開け懸命に酸素を吸い込もうとする♡

その夢子にお構いなしに男は下着に手をかけた♡

「濡れちゃって気持ち悪いっしょ♡これももう取っちゃおうね♡」

「生クリに直接当ててあげるよ♡マン肉めくって一…♡

あはは、ほんとにちょっと勃起してる♡つるつるのクリ見えちゃってるね♡」

夢子の足元へしゃがみこむ私服の二人が夢子のクリトリスを堪能している間、

夢子の乳首を責めていたスーツの男は夢子の背中へ手を回しブラジャーのホックを外す♡

もう抵抗の意味もないことを悟った夢子はされるがまま♡崩れないように体を保つことで精一杯だ♡

「生クリは痛いかもしれないから一回弱くしてあげるからね～、…これどうかな」

最初の頃のような細かい音、それが男が広げたマン肉に当てられ♡

それからゆっくりとクリトリスに触れた♡

ヴヴッ♡ヴヴッ♡

「……ひ、…んんっ♡♡」

ローターの振動は確かに弱いのに♡

絶頂してすぐの敏感になったクリトリスには刺激が強い♡

夢子は膝を閉じて反射的に拒否してしまっていた♡

「こらこら足閉じないで♡」

「…ねえ、後ろのお兄さんたちももう我慢できないでしょ、参加すれば？お姉さん支えててよ」

「お姉さんのクリ♡ピクピクしててかわいい♡このクリ
がイくところ見たいな♡お姉さん頑張っ♡」

「ふ、う♡…っん♡……あ、あ♡」

ヴヴッ♡ヴヴッ♡

敏感なクリトリスに否応なしにローターを当てられ夢
子が悶えているところに♡

残りのスーツの男と作業着の男も近づいてきた♡

さっきまでの戸惑っていた表情とは違う、確実に欲情
している顔で♡

「…お姉さんの乳首、舐めていい？さっきからこの勃起
乳首にムラついてしょうがなくて…」

そう言った作業着の男は夢子の上半身を支えるように
抱くと、

れ♡れる♡れる…♡

遠慮がちに勃起した乳首に舌を添わせ感触を確かめて
から

れるれるれるろっ♡♡れるれるれるろ…っ♡♡

根元から先端までを高速で弾き始めた♡♡

「ふっう” うう…っっ♡♡」

今までの機械的な責めとは違う♡

生身の人間の温かく湿った舌で乳首を責められ夢子は悶えた♡

きゅうっ♡と下半身が締まる♡乳首への刺激がおまんこへ直結している♡

れるれるっ♡♡れる、れるれるれる…♡♡

「あ、う`♡あっ♡あ、あっア♡♡」

「気持ちよさそ…♡クリももうちょっと強くするね〜♡」

「じゃあこっちの乳首も」

「きゃ、あ`ッ♡♡あ、あ`ッ♡♡」

れるれるれる…♡れる、れる…っ♡♡

ヴヴヴヴヴ…♡♡ヴヴッ♡♡ヴヴッ♡♡ヴヴッ♡♡

温かい舌で弾かれる乳首♡

ローターで揺らされるクリトリスと、もう片方の乳首♡♡

夢子は背中を壁に押し付け快感に耐えるように喉をそらす♡

「もう一段階強くするよ〜♡…どう？」

ヴヴヴヴヴヴ…ッ♡♡

細かい振動がクリトリスに叩きつけられて♡♡

それに合わせるように乳首への刺激も強くなる♡♡

ローターは乳首を根元から揺らし、舌は乳首を絡め取るように舐め回し頂点で弾いてくる♡♡

ヴヴヴヴヴ…ッ♡♡ヴヴヴヴッ♡♡♡

れる、れるれる…♡♡♡れる…♡れられられ♡♡

「い、やア♡♡ぜんぶ、いっしょにするの、だめ…♡♡」

夢子は握りしめていた誰かの服をさらに力いっぱい握りしめ♡♡

クリトリスと乳首から全身へ広がる快感に耐えようとした♡

「そうだ～♡クリ、ローターで挟んじゃお♡♡これすっごく気持ちいいと思うよ♡♡」

もうひとりの私服の男がいつの間にか取り出した同じローター♡

それがいきなり強い振動で夢子のクリトリスに近づいて♡

二つのローターをクリトリスの両側面から当てた♡♡

「……………ッッッ！！♡♡♡」

瞬間、あまりにも強い刺激に夢子の体が崩れ落ちた♡

乳首にローターを当てていた男がすぐに夢子の背に膝を入れてくれてなんとか床に寝そべることは回避できたが、逆にその男に上半身を拘束される形になってしまう♡

夢子が崩れても尚男たちは手を緩めなかった♡

乳首に当てられるローター、乳首を舐め回す舌、それからクリトリスを挟み強く振動するローター♡♡

夢子は体をなんとか支えていた足を浮かせその刺激にビクビクと体を震わせた♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴ…！！♡♡♡

「やあ`ア`っ♡♡それ、つよい、……ッッ♡♡くり、つよ、い…っやめ♡♡て…ッ♡♡」

後ろから男に上半身を拘束され、それでも制止しようとする手は他の男たちに掴まれた♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴ…！！♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴヴ…ッ！！♡♡

「まんこパクパクさせて何言ってんの♡」

「これでイってみせて♡♡」

「あ、あ`ッッ♡♡…ッあ`、はア♡♡あ、あッ♡♡」

ヴヴヴヴヴヴヴ…！！♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴ…！！♡♡

れるれるれるれるれるれる♡♡

れら、れられら♡♡れるれる、れるれるれる…♡♡

逃げられない♡♡

乳首に当たるローターも舌も♡♡

振動する小さいな機械に挟まれて強く震わされるクリトリスも♡♡

「……や、だ♡♡ア”、あ”♡♡も、やだ♡♡あ”ッあ♡♡くり、とめて♡♡これだめっ♡♡だめ、え”♡♡」

情けなく喘ぐ夢子に♡

それを欲情した顔で見下ろす男たち♡

夢子は男に抱えられながら、気付けば自ら足を限界まで開き♡

そのままお腹の奥へぎゅう♡と力を込めて♡♡

「……、くっ、う”♡♡だめ…だめ、いく、…っ♡♡また♡♡イっちゃう♡♡いっちゃう…からあ！♡♡」

ヴヴヴヴヴヴ…！！♡♡

ヴヴヴヴヴヴ…！！♡♡

れろれろれろれろれ♡♡ろれろれろ♡♡

れら♡れられら♡♡れろれろ、れろれろれろ…♡♡

「い”、く…………ツツツ！！♡♡♡……う”、…………ツツツ！！！！♡♡♡」

下半身をぶるぶると震わせ達してしまった♡♡

「……、ふ、う♡♡…ん、ん♡♡」

男の膝に背中を預けている夢子は情けないやら恥ずかしいやらで目に涙を溜めて♡

イったばかりの上気した肌とその涙に煽られて、私服の男の一人が性急に勃起したものを取り出す♡

「…ちんぼ挿れさせてほしいな～、いいよね？♡」

「え、いいなあ、じゃあ次俺ね」

「順番ってことで…♡お姉さん、五本もちんぼあって幸せだね♡」

夢子の口から拒否の言葉はない♡

力なく開いた足に手をかける男に促されるまま足を開き、

ぬ♡

ぬちゅ♡

ぬちゅ…♡

夢子の濡れた割れ目にちんぼを滑らせた男はそのまま腰を進めてきた♡

「っあ～～♡ぐっちょぐちょに濡れてて気持ちいい…

♡」

太く芯の持ったちんぽがぬるつくそこに押し入ってくる♡

「ふ、あ…♡あ、あ…ッ♡」

相変わらず後ろからスーツの男に抱えられて腰は逃げる事ができない♡

ちんぽを受け入れるしかない夢子のおまんこはまっすぐに入ってくるちんぽを奥で受け止めてしまった♡

「…っ♡……ふ、っ♡」

強い快感を与えられ疼いていたところへちんぽが埋まって♡

じわじわと体を蝕んでいく感覚に鳥肌が立つ♡♡

「無理、このまんこ動かすには無理わ♡」

ぬっちゅ♡

ぬちゅ♡ぬちゅ♡

男がゆっくり腰を動かし始める♡

少しだけ引いて、また奥へ押し込まれて♡

「っん♡あッう♡…んっ♡」

「きもち～…♡」

ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡

ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡

男のピストンが夢子のおまんこに誘われるように早く

なっていく♡

刺激が強くなって夢子が顔を歪めると♡

「お姉さんも気持ちよくしてあげなきゃね」

夢子を抱えていた男が夢子の胸を掬うように持ち上げ

♡

ぎゅっ♡と乳輪を搾るように強調させたあと♡

「ここにローター当ててもらおっか？」

夢子の左右にいる男に強調するように言った♡

男たちもすぐにローターのスイッチを入れて♡

男の手で突き出されている勃起した乳首へ

ヴヴ♡

ヴヴヴヴ♡♡

とローターをゆっくりと触れさせた♡♡

「あゝ うゝ …っっ！♡♡♡」

再び与えられた両乳首への強い刺激に夢子はのけぞる

♡

腰を男に捕らえれ上半身も抱かれ胸を掴まれ♡

ろくに動かせないのに刺激で背中が引き攣る♡

ビリビリと電流が駆けていくように♡

「あ、あッ♡♡あゝ、アッ♡♡やアゝッ♡♡」

ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡

ヴヴヴ♡♡ヴヴヴヴヴ♡♡

「お姉さんも気持ちよさそうで嬉しい♡♡俺のちんぽハ
メたままイってほしいな♡」

ぬちゅっぬちゅっぬちゅっぬちゅっぬちゅっ♡♡

夢子の収縮するナ力を刺激するように男の腰は小刻みに揺れて♡♡

そうしているうちに残ったスーツの男がまた見慣れないグッズを持ってきた♡

「これ、試していい？」

鮮やかなピンク色の、吸い付くタイプのクリバイブ♡

すぐに夢子のクリトリスを皮ごとぽっかり空いた穴で覆って♡

カチッ♡スイッチを押すと♡

くぽぽぽぽっ♡♡

「うっう` ううう…ツツツ！♡♡♡」

夢子のクリトリスは丸ごと刺激されてしまう♡♡

「あはは♡めっちゃまんこ締まる♡」

「乳首もクリトリスもおまんこも全部気持ちいい？」

「お姉さんイくまでずっとこうしててあげる」

「足の指ぎゅって丸めて…本気で気持ちよくなってるのかわいい」

「おもちゃ漬けにされてこのまま一回イっとこっか」

ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅっ！！♡♡

ヴヴヴッ♡♡ヴヴヴヴヴ…っ♡♡ヴヴヴヴヴヴッ

♡♡♡

くぽぽぽっ♡くぽぽ…っっ♡♡くぽぽぽぽぽ…♡♡
♡

男たちに囲まれてゆるく拘束されて♡♡
乳首もクリトリスも機械的な振動で震わされて♡♡
そうされながらおまんこの奥を太いちんぽで突かれる
♡♡

「はっあ♡♡あ、あゝッ♡♡あ…っ♡あゝっ♡あゝッッ
♡♡」

「お姉さんイきそ？まんこの奥がぎゅってして…♡♡あ
一、俺もやばいかも♡♡」

ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ…！！！！♡♡
♡

男がラストスパートの腰振りを始めると、追い詰めら
れていた夢子も煽られていく♡♡

ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ…！！！！♡♡
♡

ヴヴヴヴヴッ♡♡ヴヴヴ…ッ♡♡ヴヴヴヴヴヴッ♡
♡♡

くぽっ♡くぽぽぽ♡♡くぽっぽぽぽぽ…♡♡♡

「はっ♡♡あゝ …ッ♡あゝ ………うゝ っっ♡♡♡」

「まんこの締めりえぐ♡♡これめっちゃ気持ちいい♡お姉さんと一緒にイケちゃうやつ♡♡♡」

「うゝ ッうう…っ♡♡いくっ♡♡またイク…う♡♡……あ、あゝ ッ、あああゝ ああ…っっ！！♡♡♡」

浮いていた足がピン♡と引き攣って♡

男も乱暴に腰を振って、呻きながらちんぽを震わせ夢子のナカへ吐精した♡♡

「…は♡♡う♡う、う♡」

余韻にまだ奥が疼く♡

仰向けになって動けないでいる夢子の足の間へ、もう一人の私服の男が割り込んできた♡

「今度俺でいい？お兄さんたち後ね♡」

男はすぐにちんぽを取り出し何度かしごく、すぐに夢子の入り口に当てた♡

そのまま待ちきれない様子で濡れたそこへちんぽを沈めていく♡

男が力を入れなくてもそこはもうすんなりと飲み込む
ほどに濡れている♡♡

「うゝ、ん…♡♡♡」

ちんぽが出ていって閉じかけていたそこへまた太いものが入ってきて広げられて♡

夢子はその感触に身を振っていると、さっきまでクリバイブを当てていた男が夢子のクリトリスに手を伸ばした♡

「さっきと同じじゃつまないでしょ、今度は生クリしてあげるね」

夢子の反応を予測してだろう、夢子の腰をしっかりと押さえ込んで♡

その先の人差し指と中指で皮をずり下げて固定して♡

今度は敏感な粒だけをクリバイブの穴で覆った♡

「…あ、あゝッ♡」

それだけでもイったばかりで過敏に反応してしまうのに♡♡

男がスイッチを入れると♡♡

ぐぽぽぽぽぽ…！♡♡

「……ッッ！♡♡うゝ っんゝッ♡♡♡」

体が跳ねあがるほど足先から頭のとっぺんまで快感が

走っていく♡♡

ぐぽぽぽぽぽぽ…！♡♡

ぐぽぽぽぽぽぽ…！♡♡

「やッあゝ…！♡♡あゝ ツツ♡♡あ、あゝ アっ！♡♡」

「すっご♡そんなにいいんだ♡」

「押さえてないとちんぽ抜けちゃうって♡」

ぐぽぽぽぽぽぽぽ…！♡♡

ぐぽぽぽぽぽぽぽ…！♡♡

「もっと強くしようか」

「…っ！！♡♡やだ、やだやだ♡♡もういいです、もう、
——ひ、……ツツツ！！♡♡♡」

ぐぽっぐぽぽぽぽぽツツツ！！♡♡♡

敏感なクリトリスを吸われて小刻みに叩かれて♡♡

夢子は男たちに押さえつけられながらものけぞってしまふ♡♡

反射的に逃げようとする腰を挿入してる男が掴んで♡

「ちんぽも感じてくれなきゃつまんないよー♡」

どちゅ…っ♡♡♡

奥へ刺すように押し込んで♡♡

それから存在を思い知らせるかのように腰を夢子へ叩きつけ始めた♡♡

どちゅ、どちゅ、どちゅ、どちゅ、どちゅ♡♡

ぱん、ぱん、ぱん、ぱん、ぱん♡♡

「っあゝ♡♡あっ、あゝ…♡あ、う♡……アゝ ツあ♡

♡」

体の深いところと、懸命に勃起しているクリトリス♡

♡

その両方に刺激を与えられて夢子はまた快感に支配されていく♡♡

夢子の汗ばむ顔を、さっきまで挿入していた私服の男が撫でて♡

その顔がゆっくり近づいてきた♡

「キスしよ♡」

愛おしそうに笑んでそうされるから、夢子も思わず顔を向けてしまって♡

「……ん、んむ♡は、あ…♡」

唇同士が密着した後、閉じていた唇を唇で食まれ、それから舌が舌を探るように入ってきた♡

おまんことクリトリスへの刺激とは対照的な甘いその刺激に夢子の目がとろん♡と潤む♡♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっ♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱん…っ♡♡

ぐぽぽぽぽっ♡♡ぐぽぽぽぽぽっ♡♡

「んっ♡♡うゝ、ん♡あっふ♡♡うっ♡♡」

夢子がされるがままにただ喘いでいると♡

かりっ♡♡

キスしている男が乳首を引っ掻くように弾き♡♡

ヴヴヴッ♡♡

もう片方の乳首は横にいた男にさっきクリトリスにされたように二つのローターで挟まれた♡♡

「うっっん` ツツツ♡♡♡」

体中を余すことなくいじられて♡♡

夢子の体は力みながらふるふると震える♡♡

足は自ら大きく開き下腹部に力を込めて♡♡手は誰のものかももう分からない服を握りしめ♡♡舌を突き出す♡♡

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅ！♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱん！♡♡

ぐぽぽぽぽっ♡♡ぐぽぽぽぽぽぽっ♡♡

かりっかりかりかり♡♡かりかりかりっ♡♡

ヴヴヴッ♡♡ヴヴヴヴヴ、ヴヴヴヴッ♡♡

男たちに与えられる快感に追い詰められていく♡♡

「……っ♡♡んん” …ッ♡♡…う、やあ♡♡またイク♡♡いく♡♡」

「そうだね♡まんこぎゅー♡ってちんぽ抱きしめてくれる…♡♡」

「クリバイブ最大にしようか」

男はクリトリスにバイブを当てたまま、また何度かスイッチを押して♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴヴッッッ！！♡♡♡

クリトリスが焼き切れるんじゃないかと思うほどの強い刺激に夢子は体を引き攣らせたまま目を見開いた♡♡♡

「——あ” ツあ”、あ” …ツツツ♡♡♡だ、めツツ♡♡♡い”、くっっ、それだめ、え” …！！♡♡♡……う”、あ” ………ツツツ！！♡♡♡」

「俺も出る～…♡♡♡…っ♡」

…ぱんっ！♡♡

ぱん、ぱんっ♡♡

「…っは♡……、っ♡」

夢子の絶頂の瞬間に最奥に押し込まれ、吐精したちんぽはずるりと抜けていった♡

すぐにローターもクリバイブも離れてくれたものの、夢子の体はまだぴくぴくと余韻に反応してしまっている♡

「俺、お姉さんのクリしゃぶりたくなっちゃったな。上乘ってくれる？」

「顔面騎乗いいね～♡お姉さんほら起きて♡」

「誰かバックでちんぽ挿れてあげなよ」

体はもうくたくたなのに夢子は拒否もできない♡

クリバイブを当てていたスーツの男が床に寝そべって、他の男が夢子を抱き起こし跨がせる♡

知らない男の顔に跨るなんて抵抗感があるのに体に力が入らないせいですぐにそこへへたり込んでしまった♡♡

「あ～…いい眺め…。ぐちょぐちょでとろとろのまんこ

…♡」

夢子の体液と挿入していた男の体液で濡れたおまんこ♡

夢子がへたり込んだせいでスーツにその体液がついても男はうっとりとその入り口を眺め、それから夢子の腰を掴んで軽く持ち上げた♡

ちゅ、ちゅ♡

ぶちゅっ♡

割れ目にキスするように口をつけて、それから大きく口を開けそこを覆う♡

「…ひ、っ♡♡」

くすぐったいような感触に夢子が声をあげると今度は舌でそこを大きくべろりと舐めて♡

ぢゅ、ぢゅるっ♡

ぢゅ、ぢゅ♡

口をすぼめて夢子のおまんこ全体に吸い付いた♡

「あ、あ♡…っ♡あ♡」

吸引されて体の力が抜ける♡

それでも腰をしっかりと掴まれているせいで逃げることはできない♡

ぢゅるっ♡♡ぢゅ…っ♡

ぢゅぼ、ぢゅっ♡

男の口はそのまま夢子のおまんこのあちこちを堪能するように吸いながら♡

ゆっくりと上へ上がってきた♡

「ふ♡あ♡あ…ッ♡あッ♡」

ぢゅ、ぱっ♡

クリトリスに到達する直前に口を離したかと思えば♡

長い舌が伸びてきて♡

れろっ♡

れ…♡れ～♡

「ふっう`、うう♡」

クリトリスと皮の間を辿るように舌先で一周舐め回して♡

それから♡

ぢゅ…ッッッ♡♡♡

といきなり強くクリトリスに吸い付いた♡♡

「あ` ッッう`♡♡♡」

のけぞった夢子の体は

ぢゅ…っっぽ！♡♡♡

「はあ` アあ` ッ♡♡♡」

吸い込まれたクリトリスが音を立てて解放され思わず目へ倒れ手をついた♡♡

そして四つん這いになって浮いてしまった夢子の腰をたしなるように男はクリトリスに吸い付いてそのまま引

っ張る♡♡

ぢゅっっぽ♡♡ぢゅ…っぽ♡♡

「う、んっ♡♡ん、あっ♡♡あッ♡♡」

「どう見てもちんぽ誘ってるとしか思えないよな」

背後にいたもう一人のスーツの男♡

クリトリスを吸われひくつかせているおまんこに誘われるようにすぐにちんぽを取り出して♡

夢子の背中にぴったりと進んできた♡

「お姉さんエロすぎ…」

ぬ、ぷっ♡♡

既に下の男に掴まれていた腰を男も掴んで♡♡

ちんぽを埋めていく♡♡

ぬっ♡♡

ぬちゅっ♡♡

「あっ♡♡あ、ん…ッ♡♡」

強い力で吸われているクリトリスの奥♡

ナカがまた硬いちんぽで広げられる♡♡

敏感な粘膜を刺激されている♡♡

ぬ、こっ♡♡

男はすぐに動き始めた♡

ぬこ、ぬこ♡

夢子を突き上げるように腰をスイングする♡

「っあ♡あ、あッ♡」

ちんぽを埋められたそのすぐ上では吸われたままのクリトリス♡

男は更に刺激を与えようと吸い上げた口内でクリトリスの先端を舌で舐め回し始めた♡♡

れるっ♡♡れるれるれるれるっ♡♡

クリトリスから背中へビリビリと電流のような気持ちよさが駆けていく♡♡

夢子は二人に掴まれ自由に動けないながらもものけぞってそれに耐えた♡♡

ぬこっ♡♡ぬこっ♡♡ぬこっ♡♡ぬこっ♡♡

れる、れるっ♡♡れるれるれる…っ♡♡れる、れる、れる♡♡

突き上げるちんぽと敏感なクリトリスを刺激する舌♡

夢子が下半身への快感に浅い呼吸をすると♡

「これ、今度は乳首に使ってみようか♡」

私服の男がクリバイブを乳首にあてて♡♡

くぽぽぽぽぽ…♡♡くぽぽぽぽっ♡♡

とスイッチを入れるから♡♡

「あゝ…ッッッ♡♡♡」

夢子の体がしなる♡♡

胸をそらし強調されてしまった片方の乳首へ今度は男
が吸い付いた♡♡

ちゅっ♡♡ちゅ…うっ♡♡

乳輪ごと唇で吸い上げるようにそうされて♡♡

気持ちよさのあまり喉をそらすとだらしなく開いた口
に今度は作業着の男が唇を寄せてくる♡♡

唇の隙間から舌を差し込み力の入らない夢子の舌にね
っとりと絡みついた♡♡

また体の全てを気持ちよくされている♡♡

「…んあゝ、あッ♡♡や、ああ♡♡また、ぜんぶ♡♡ぜ
んぶするの、だめ♡♡これだめ…っ♡♡」

ぬこっぬこっぬこっぬこっぬこっぬこっ♡♡

れるっ♡♡れるれるれる♡♡れるるるる…っ♡♡れ
るれるっ♡♡

くぽぽぽぽぽ…っ♡♡くぽぽぽぽぽ…っ♡♡

ちゅっ♡♡ちゅ、ちゅっ♡♡ちゅぽっ♡♡ちゅぽっ
♡♡

「だめって、気持ちいいんでしょ？♡

「もう顔もどろどろにとろけてるくせに」

「男五人に囲まれて気持ちいいとこ全部いじられて、幸せだね♡」

「何回イっても気持ちよくなれちゃうお姉さんも悪いでしょ」

「おまんこもまだ締めてくるし…、もっとペースあげようか」

■続きは製品版にて♡